

結城哲彦さんを偲んで

RCLIPのウェブサイトには何度かエッセイを書く機会があったが、まさかこのようなことで小文を認めることになるとは夢想だにできなかった。

我々の多くが結城さんに最後にお会いしたのは、2019年6月17日の博士論文経過報告会だった。ちょうど長期滞在先のミュンヘンから一時帰国していた私は、会場に向かうべく8号館を出た瞬間、早大南門からはじまる小さな勾配を踏みしめるように上がって来られる結城さんに突然遭遇した。些か唐突だったその邂逅に、恥ずかしながら声をかけられなかったあのときの自分は何だったのか、今も繰り返し脳裏を去来する。

報告会が留学生三名の発表によって終了した後、わざわざご挨拶にいらして下さった結城さんに、私は、数日前にご恵贈いただいたばかりの新刊書『広告表示の法的規制と実務対応Q&A』（中央経済社）の御礼を申し上げたところ、同書には私の元学生でもある弁護士二名が執筆に加わっていたことから、「いや私よりね、若い人たちが頑張ってくれましたよ。お世話になりました。」と言ってくださったのだが、これが私にとって最後となった。

帰欧と重なってご葬儀に参列できなかったからだろうか、私は、結城さんが今もまだ早稲田のどこかにおられるように感じてならない。そのため、今は何かを振り返るような気にならないのだが、結城さんは、誰もが認めるように、常に熱い情熱をもって誰とでも議論し、最後の最後まで書籍執筆など研究活動を続けられる一方で、留学生を中心とする若者にあたたかく手をさしのべて文字通り献身的なサポートの労を惜しまなかった稀有な方だった。その存在感あるお姿やお声はいつまでも我々の心に残ることだろう。いや、私の中では、結城さんはこれからもずっと早稲田のどこかにおられるのだ。

上野達弘（早稲田大学法学学術院教授）